

# 人工知能の社会学

## ——自動運転を題材にした社会秩序についての考察——

富山大学 佐藤裕

### 1 目的

近年、人工知能（AI）関連の技術はディープラーニングなどのブレークスルーをきっかけに急速に発展してきている。そして、そのことは私たちの社会にも大きなインパクトを与えることが予想される。このような状況に、社会学はどのような貢献ができるだろうか。

社会学者ができることは、AI技術が社会に対して何らかの影響を与えた後に、その影響を実証的に確認し、要因やプロセスを解明するといったことではないか、おそらく多くの社会学者はそう考えるのではないだろうか。つまり、AIがこれから社会にどのような影響を与えるのかを予測することは、（少なくとも現在の）社会学には困難なことだと考えられているのではないだろうか。しかし私は、AIに関わるほとんどの技術者が見落としているのではないかと思われる視点から、社会学者がAI技術のありようについて、予測や提言を行う余地があると思う。それは、私たち社会学者は「社会秩序」がどのようなものなのかを（ある程度は）知っており、AIがその秩序の構成員になれるかどうか、もしなれたとすればどのような問題が生じるのかといったことを示すことができると思うからだ。

AIが社会秩序の構成員になる。そんなことは遠い未来の話だと思われるかもしれないが、そうではない。AIによる車の（完全）自動運転は、交通システムという社会秩序にAIが参入することを意味しているからだ。そこで、本発表では自動運転を題材に、AIが社会秩序を構成することができるかどうかを考察していきたい。

### 2 方法

自動運転の問題点を考察するに当たり、2つの補助線を用いる。

ひとつは、いわゆる「(人工知能の)フレーム問題」である。車の自動運転では「フレーム問題」は生じないのだろうか。また回避可能なのだろうか。実は「フレーム問題」で重要なのは「フレーム」ではなく、別の基準であることを明らかにしたい。

もうひとつは、「ルール」の具体的運用についての議論である。私たちが「ルール」を守る方法と、AIがルールを守る方法は同じだろうか。私は両者には大きな違いがあると考えている。

### 3 結果

以上の考察から私が導こうとしているのは、私たちの社会秩序には「責任」と「信頼」という要素が不可欠であるという、（おそらくすべての社会学者にとっては常識的な）結論である。そのことを改めて確認したうえで、AIには「責任」や「信頼」を獲得し運用することが可能なかを検討する。これは技術的に解決可能な問題ではなく、「社会的な解決」が求められる問題なのだとは私と考えている。

### 4 結論

AI技術の発展は、単に「道具」として便利なものが増えていくということではなく、AIを「社会の一員」として扱わざるを得ないような状況を作り出していかかもしれない。そのような状況を想定して、「社会的な問題」としてAIがもたらす問題を考察することこそ社会学の使命ではないだろうか。

### 文献

佐藤裕, 2016, 『ルールリテラシー—共働のための技術』, 新曜社

佐藤裕, 2019, 『人工知能の社会学(仮題)』, 2019年夏にハーベスト社から刊行予定 ダニエル・デネット「コグニティブ・ホイール 人工知能におけるフレーム問題」 信原幸弘訳『現代思想』Vol.15-5